

## IV 花 き

### 実 況

#### 1 キク

奥越地区では、2月中旬現在で積雪がなく、秋植えキクの冬至芽の芽立ちが昨年より多くなっている。2月12日の調査（昨年：2月12日）では、1m<sup>2</sup>当たりの芽立ち本数が「精かのか」で181本（昨年：84本）であった。

病害虫として、ネキリムシの食害が1月下旬より始まり、昨年よりさらに半月以上早い発生である。

坂井地区の秋植えキクでは、2月14日の調査で、ハウス内に定植した品種（「清風」他）は、トンネル無しでも草丈が3～6cmと伸びが早い。例年より10～20日生育が早まっており、生育の揃いは良好である。露地のものは元株の除去を開始した。

病害虫として、ハウス定植の親株にアザミウマ類、アブラムシ類が部分的に少発生している。



ハウス内秋植えキクの生育状況  
（あわら市、2月）

福井地区では、親株にアザミウマ類が発生している。白さび病は発生していない。

丹生地区では、2月14日調査で親株にアブラムシ類は少～中発生している。

南越地区では、2月17日調査で、親株に白さび病が少～多発生、灰色かび病が少発生している。害虫発生はなかった。

二州では、2月12日調査で、親株に白さび病は少発生している。

若狭地区では、親株にアブラムシ類が少発生している。

#### 2 スイセン

スイセンの出荷ピークは12月下旬～1月上旬（昨年：12月上旬）となり、年内までの出荷量は52万本（昨年：68万本）と昨年より少なめであった。年明け以降は26万本（昨年：

8万本)となり、昨年よりも多くなった。最終荷受けは2月5日で、総出荷量は78万本(昨年:1月30日最終荷受けで76万本)であり、昨年より若干増加した。

### 3 トルコギキョウ

あわら市では切り下株を保全している。  
病害虫は特に発生していない。

越前市では2月17日調査(昨年:2月19日)で、9月中旬播種で11月14日に定植がされた品種の草丈は3~11cmで2~4対葉(昨年:草丈5cm、8対葉)であり、昨年に比べて草丈が伸長している。目下ビニールトンネルの被覆を行っている。

病害虫は特に発生していない。

### 4 ストック

あわら市丘陵地の夏播き秋冬どりのストックは、部会の出荷は12月20日から本格的に始まった。暖冬の影響で開花が揃い、1月に集中出荷できた。部会以外の出荷については、9月20日播種のアイアン系3品種は、当初3月20日頃に出荷予定であったが、暖冬の影響で「マリン」が2月25日頃から出荷が見込まれる。「ホワイト」と「ピンク」は第1~3花が開花し、3月から出荷予定である。いずれも15から20日前後生育・開花が早まっている。



ストック生育状況(あわら市、2月)

越前市では、「カルテット」シリーズが8月20日~9月10日頃にかけて直播された。2月17日調査で(昨年:2月19日)で、8月20日~8月末に播種された品種では、収穫が終了した(昨年:収穫終了)。9月10日頃に直播された品種では、草丈100cm程度で収穫が始まろうとしている(昨年:草丈95cm、ピンチ済みで収穫始め)。

二州地区では8月中旬~9月上旬播種の個体で、出荷が始まった(2月12日現在で20%程度)。9月20日播種・10月20日定植の個体では、2月12日の調査で草丈60cm、展開葉数が40枚で立弁である。一部地区で灰色かび病が少発生している。

若狭地区では、10月中旬播種のもは草丈50~70cmで開花し始めた。

## 対 策

### 1 秋植え夏ギクの春先管理

- (1) 古い茎葉は病害虫の一次発生源となるので、消雪後の出芽前後に地際部から除去する。特に、黒さび病の罹病が認められる品種は、除去後の古枝を肥料袋等で回収し、圃場外で速やかに処分する。
- (2) 防霜対策として、出芽してきたシュートを保護するために不織布でべた掛けする。べた掛けは開花も早まる可能性があるため、よく畝を観察し、1、2割のシュートがのぞいた時を見計らって行う。
- (3) 暮れに施した硝酸態の肥料は、ほとんど流亡しているため、基準量をしっかりと施用する。
- (4) 春肥施用後、畝溝の溝さらえを兼ねて2~3 cmの土寄せを行う。

### 2 春植え夏秋ギクの採穂と挿し芽

- (1) 採穂の1~2日前に親株の病害虫防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤の散布により、黒斑病や褐斑病、白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよい。
- (3) 摘心した親株から採穂する。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3~4枚をつけ、長さ5~7 cmに調整する。
- (4) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とし、深さは1.5~2 cmとする。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+くん炭5、パーライト5+ピートモス5、山砂7+ピートモス3などを用いる。一部の地域では、モミガラ単用で利用されている。
- (6) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろふ。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7~10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。

### 3 春植え夏秋ギクの定植準備

- (1) 春先の圃場排水を行い、旧盆ギクは4月15日までに定植できるよう作業を進める。
- (2) 肥料は有機質肥料を主体に窒素成分で中輪ギク3 kg/a標準とし、この内1~2割を、そさい5号等の速効性化学肥料とする。
- (3) 定植圃場の耕耘は、土壌水分が適切な状態の時にロータリーの刃の回転をあげて行う。

### 4 トルコギキョウの定植準備と定植

- (1) 圃場は土が柔らかく、排水性が良いことに加えて、20 cm以上の高畦とする。
- (2) 基肥はa当りF<sub>1</sub>品種で窒素成分を1~1.3 kg、リン酸は1.5 kg、カリは2 kg程度施す。

- (3) 苗が根づまりしたり老化したりしないように、本葉 1～2 対頃を目安に早植えする。  
15 cm×15 cm の 6 条植えとする。定植時に直根を切ると生育が悪くなるので注意する。
- (4) 土壌酸度 (pH) は非常に重要であるので、必ず測定して 6.5 程度に矯正する。
- (5) 定植 3～4 日前に、植付け場所に十分灌水する。また、育苗箱を定植場所に持ち込み順化を行う。育苗箱に弁当肥 (液肥 500 倍) を施しておく。
- (6) 定植後は液肥 1000 倍を灌水がわりに施す。その後 1 か月間は週 1 回液肥を施す。
- (7) 花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉 8 対 (草丈が 15～20 cm) 頃までは適宜、水分や肥料を十分に与える。
- (8) 二度切り栽培は草丈が 10～20 cm に達した時点で、生育が良い枝を 2 本程度残してその他の枝を取り除く。

## 5 スイセン養成圃場における施肥管理

養成中のスイセン球根を肥大させるため、3月上旬までにそさい5号を10a当たり40kg施用する(窒素成分量6kg/10a)。

AMeDAS のデータ



